

作品名「たのむんな」

満州に行ったのは十五歳のときやった

六人兄弟の三男は耕す土地はない

隣の幼なじみの五男の勝まきるといった

満蒙開拓青少年義勇軍と言うてな

訓練を終わって開拓団員になったら

二十町歩の地主になれると言われた

銃を持って針のような風の中で兵の訓練もした

国民学校の鈴木先生に勧められていった

米と大豆をつくりはじめとった

帰ってきて知ったことやけど

農地は現地の人を追い出して安く買うたんやなあ

昭和二十年八月九日に

ソ連軍が国境を越えてやってきた

いつのまにか関東軍はおらんだ

置き去りにされたんや

コーリヤン畑の中に身をかくしながら夜中に歩いた

靴の底は破れてひきずとった

蔓を見つけたら紐の代わりにしばってな

食べるものがないで草を食べて澁かったなあ

腹を下してよろよろしか歩けやん

現地の人の軒下に隠れとつたら

家のお母さんがコーリヤン粥を一杯ずつくれた

勝と泣きながら食べた

その味は今でもよう忘れやん

そのうちにソ連兵に見つかった

チチハルの難民収容所に行った

ござみたいなアンペラの上に寝て寒てさむてなあ

凍えとつた

冬には零下三十度になって

お休みとって寝た勝が翌朝亡くなつとつた

凍って穴が掘れやんで勝を原野の氷の上に置いてきた

泣いても涙が凍って心も凍ってぼんやりしとつた

狼に食べられるやろと思たけどしかたなかったんや

年上の友達はシベリアに連れていかれた

昭和二十二年四月に日本に帰ってきた

鈴木先生が家にきて

「満州に行かせて悪かった」と

頭を畳に擦りつけて謝っておくれた

「帰れたからええんや。そう思わんと生きていけやん」と
言うたけど

勝は帰ってこれやんだでなあ

後からいろいろな話を聞くと

学校から何人出すようにと割り当てがあったんやそうな

ロシアがウクライナを攻めとる

幼い顔のウクライナの少年が

よろよろ歩いとるのがニュースに写っとる

五歩歩いては止まり

七歩あるいては止まり

汚れた靴は爪先がほつれて口あけとる

上着の裾は破れとるし

ズボンは汚れて膝が抜けかけとる

防寒帽の耳かくしの片方が千切れかけとる

すすけた涙を流したまま

手に下げた荷物を引きずるように歩いとる

家族は亡くなったんやろなあ

ひとりでどこまで行けるやろ

高祖父^{おおじい}ちゃんの十五歳の姿の生き写しや

どうぞやさしい人に出会ってほしい

戦争はしたらあかんのや

相手を殺さな自分が殺される

それが戦争や

勝ってもまけても良い人生はおくれやん

死ぬまで夢でうなされる

勝は同級生の和子ちゃんの亡高祖父おおじいちゃんに当たる人

戦争はしたらあかんのや

高祖父ちゃんは先に逝くけどな

たのむんな

戦争はしたらあかん